

大江健三郎の評論

上田正行

次の文章は『作家の随想』シリーズ第一期十巻（日本図書センター刊）の内の一巻として企画された『大江健三郎集』の解説である。この企画は大江の「未だ全エッセイをまとめる段階ではない」との理由で了解を得られず、大江の巻が出ないことになった。宙に浮いた原稿をこのような形で活字化するのには本意ではないが、一九九四年度ノーベル文学賞受賞の記念として、大江へのささやかな献辞としたい。

まず、本巻に収められた評論・エッセイの初出と収録作品集名を上げておく。

I部 戦後の出発

戦後世代のイメージ

「週刊朝日」一九五九年一月四日号〜二月二日号

月二日号

敵・同1

強権に確執をかもす志

「世界」一九六一年七月号 敵・同1

戦後世代と憲法

「朝日新聞」一九六四年七月一六日〜一八日

独立十年の縮図——内灘
六日号

「朝日ジャーナル」一九六二年五月

敵・同1

II部 ヒロシマ・沖縄・アジア

日本に愛想づかしする権利

一〇日号

「サンデー毎日」一九六五年一月

敵・同1

原民喜を記念する（講演）

日号

「週刊読書人」一九六五年四月五

持・同2

原爆後の日本人の自己確認

「世界」一九六八年八月号

持・同2

文学者の沖縄責任

「群像」一九七〇年九月号

敵・同4

沖縄・インド・アジアの旅

「朝日新聞」一九七一年一月一一

日〜一三日

鯨

III部 アメリカの夢

アメリカの夢と悪夢 「世界」一九六六年一〇月号 鯨・同5
パール・ハーバーにむかって 「世界」一九六七年九月号 鯨・同5

「強大なアメリカ像」の崩れたあとに 「週刊朝日」一九六八年四月二〇日号 持・同3

Ⅳ部 核時代の想像力
核時代の『三酔人経綸問答』 「図書」一九六九年一月号 鯨・同2

状況と文学的想像力(講演) 未詳 鯨
皇帝よ、あなたに想像力が欠けるならば、もはやいうことはありません 「群像」一九六九年二月号 鯨・同5

Ⅴ部 文学的出発
受賞の言葉 「東京大学新聞」一九五七年五月二二日 鯨
徒弟修業中の作家 「朝日新聞」一九五八年二月二日 鯨
現代文学と性 「東京新聞」夕刊一九六三年五月三〇日〜六月一日 鯨・同1
『われらの時代』とぼく自身 新潮文庫「われらの時代」あとがき(一九六三年六月) 鯨・同1
ぼくの戦争文学 未詳 鯨
ぼくの小説作法 未詳 鯨
同時性のフットボール 「中央公論」一九六七年一月 持

Ⅵ部 同時代としての文学と文学者
恩賜的と恢復的 『明治文学全集27』月報(1)(筑摩書房)一九六五年二月 持・同3

「記憶して下さい。私はこんな風にして生きて来たのです」 「図書」一九六五年十二月 持・同3
子規・文学と生涯を読む 「文学界」一九八一年一〇月号 鯨
オーデン 「朝日新聞」一九六三年七月二八日 鯨
戦後文学をどう受けとめたか 「群像」一九六三年二月号 鯨

安部公房案内 『われらの文学7』解説(講談社)一九六六年二月 鯨・同1
二月 持
中野重治と「梨の花」の文章 『中野重治研究』(筑摩書房)一九六〇年九月 持
田村隆一と垂直の人間の声 「新潮」一九六六年十一月 持・同6

「心やましさと心やさしさ」 『渡辺一夫著作集』月報7(筑摩書房)一九七一年三月 鯨・同5
第五部のためのノート 『鯨の死滅する日』(文芸春秋)一九七二年二月 鯨
大岡昇平・死者の多面的証言 「群像」一九七二年二月号 鯨
堀田善衛・Yes, I do. 「群像」一九七二年五月号 同時・同6

Ⅶ部 祈り

信仰を持たない者の祈り（講演） 一九八七年一〇月 於東京
女子大学 人

敵……『敵愾な綱渡り』文芸春秋刊 一九六五年三月

持……『持統する志』文芸春秋刊 一九六八年一〇月

壊……『壊れものとしての人間——活字のむこうの暗闇』講談社

刊 一九七〇年二月

鯨……『鯨の死滅する日』文芸春秋刊 一九七二年二月

同時……『同時代としての戦後』講談社刊 一九七三年三月

同……『大江健三郎同時代論集』全一〇巻岩波書店刊 一九八〇

年一月〜一九八一年八月

核……『核の大火と「人間」の声』岩波書店刊 一九八二年五月

人……『人生の習慣』岩波書店刊 一九九二年九月

「敵」「持」「鯨」所収のものは講談社文芸文庫本を底本とし、他
は『大江健三郎同時代論集』各単行本、初出紙を底本とした。

右の一覧からも分かるように、大江の膨大な量に上る評論・エッセイの中から極めて限られたものしか選ばなかったことをお断りしておきたい。それともどちらかと言えば文壇登場の二十二歳から三十六歳までの足かけ十五年間の足跡を刻んだ、『敵愾な綱渡り』『持統する志』『鯨の死滅する日』の三冊の全エッセイ集からのものが中心となった。これ以降も多くのエッセイ集が刊行され、主要なものは『大江健三郎同時代論集』にまとめられたが、そこからの採録も僅かであり偏りがあるという非難は免れない。

しかし、膨大な量に上るエッセイであるが、三冊の全エッセイ集に大江の基本的なものが凡て盛り込まれていると言っても過言ではない。大江のその後のエッセイは凡てここから出て、ここに選んでいるとも言える。出発期のみずみずしい感性と、作家、評論家、研究者の三者が未分化のままでもかもし出す混沌としたエネルギーのようなものが感じられる。

それにしても本職の小説以外で、これほど精力的に評論を書き続けている作家も戦後文学（現代文学）には珍しい。量、質ともに小説と拮抗するだけのものを具えていることも特筆に値する。このことだけからでも大江が評論・エッセイという分野に並々ならぬ決意を以て臨んでいることが知られる。はじめジャイナリズムからの要請があつてのことであろうが、いつしかこれに自覚的に対し評論という分野に積極的意味づけを行い、以後、その姿勢を一貫して持続してきたと言つてよいであろう。大江が評論に託してきたものとは何であつたのであろうか。

大江の関心は多岐にわたり、そのエッセイを見てもあらゆる分野を網羅し百科全書的な面影さえあるが、それは外観の華やかさで、出発以来、時代と状況に積極的に関わりとうとする強い意志があつた。即ち、憲法、民主主義、平和と言つた戦後の民主主義の原理を脅かすものへの警告と異義申し立てに於て、大江は常に積極的であり主導的であつた。政治の状況に常に敏感に反応していることと言えば、時代を丸ごと体現して生きている作家と言つていい。時代の子として、勤勉な優等生として、時代を鏡として歩んできたその四十年近い歳月は、一言で言えばデモクラットの生涯、あるいは大江が渡辺

一夫を論じてよく使う言葉にならって言えばユマニストの生涯と言えよう。大江はユマニストとして、又、デモクラットとして戦後の時代を生き続けている時代の証言者であり、異義申し立て者である。この側面が最もよく出ているのはⅠ部、Ⅱ部であろう。そこでは先ず憲法があつく語られている。大江のデモクラットとしての原理がこの憲法にあることは言うまでもない。

ほくらはそれ（注 自衛隊）と《戦争放棄》のモラルとのあいだに、なんとか妥協点を見出そうとしている、日本人すべてがそのようにつとめている。これは日本人の基本的なモラルにとって悲惨なことではないか？ それは本質的なところでわれわれに、頽廃をもたらすものではないか？（戦後世代と憲法）

第九条に関わる一九六〇年前後の青年の潔癖な目がここにある。

言葉だけを弄び現実と乖離して行く憲法の空洞化、そこにモラルの頽廃があるというこの指摘は《解釈改憲》の欺瞞を正確に突いている。大江はまず、危機に瀕し始めた憲法の精神を守るべく異義申し立てを始め、その押しつけ論議に対しては「恩賜的と恢復的」でこれに一矢を報いた。《恩賜的の民権を自己の主体と責任において《恢復的》な民権とすることに積極的な意義と民主主義の生育を見ようとする。

東西緊張の緩和、民族紛争、PKO法案下での国際協力、日本の経済大国化という一九九〇年代の状況下でこの憲法がさまざまな揺さぶりをかけられている。この時期に今一度、大江の主張を反芻することは、民主主義の原点を問う意味で貴重である。

憲法がデモクラシーの原理として大江の生き方を決定したように、

今一つ大江を状況に積極的に関わらせようとしたものにヒロシマがある。大江は一九六三年夏、はじめて広島を訪問し原爆による被爆状況を見聞し、原水禁運動の分裂に直面した。翌年十月から『ヒロシマ・ノート』を『世界』に連載し、六五年六月に岩波新書としてこれを刊行した。

僕は広島島の、まさに広島島の人間らしい人々の生き方と思想とに深い印象をうけていた。僕は直接かれらに勇気づけられたし、逆にいま僕自身が、ガラス箱のなかの自分の息子との相関においておちこみつつある一種の神経症の種子、頽廃の根を、深奥からえぐりだされる痛みの感覚をもあじわっていた。そして僕は、広島とこれらの真に広島のなる人々をヤスリとして、自分自身の内部の硬度を点検してみたいとねがいはじめていたのである。（プロ

ローグ 広島へ……）

同じこの年の六月に頭部に奇形を持つ長男の誕生があり、この不意に落ち込んだ穴はこの暗闇から這い上ることと広島行とは重なっていた。従って、小説『個人的な体験』（一九六四年）と『ヒロシマ・ノート』（一九六五年）の完成は緊密な関係にあることは言うまでもない。障害児を自ら引き受けて育てて行く決心をする主人公の造型は、そのままヒロシマで困難な状況を自らに引き受けて生きている多くの正統的な人間との出会いと正確に見合っていた。以後、大江はこのヒロシマを自己の人間の核に据え、《自分自身の感覚とモラルと思想とを、すべて単一に広島島のヤスリにかけ、広島島のレンズをとおして再検討すること》を自らに課するのである。《広島島のヤスリ》という表現は剛直な作家中野重治が好んで用いたヤスリ、ふ

いご、ささら等から来ていると思われるが、この農村の生活の実感に根ざした言葉とモノとの関係を中野が行った如く追体験し、その生活実感を獲得して行こうとするのが大江の自己に課したものであった。その持続が種々の作品を生み、想像力論を生み、「世界はヒロシマを覚えてるか」の放送となり（一九九〇年八月三日NHK総合）、又、森の思想として拡がって行く。ヒロシマは大江を持続的に作家たらしめた「生命の木」とも言える存在に成長したのであった。

しかし、このヒロシマを核に据えた大江の思索と行動の原理は、例えばアメリカからはパール・ハーバーの反撃を喰い、アジアからは侵略戦争の責任論、罪の償いとなって返ってくる。これに対して大江は「戦争の悲惨への想像力」論を展開する。

核時代の狂気を生きのびるために、核兵器の威力の論理にみずからを縛ることなく、核兵器のもたらす人間的悲惨を、自分の論理の核心にすえることのできる唯一の存在は、戦後の日本人でなくてはならない。（パール・ハーバーにむかって）

この「戦争の悲惨への想像力」論が現実にとれほど有効であるかは分からないが、挟み撃ちに逢いながらこの一見、無力とも思える論理を中核に据えることが人間としての大江の良心の帰結であり、持続せねばならない志であった。ここにデモクラット大江の変らぬ感性がある。

ヒロシマと並んで大江の「感覚とモラルと思想」とを研ぐヤスリとして沖繩がある。ヒロシマ訪問と踵を接する如く一九六五年の春に始めて沖繩を訪れ、『沖繩ノート』（一九七〇年）を刊行するまで

しばしばここを訪れた。そこに憲法と民主主義を含めた日本そのもの、日本人そのものを問うものがあつた。沖繩を踏み絵として「日本人とはどのような人間なのか」としばしば見せつけられた大江は「日本人とはなにか、このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないか」と自問した。そこにサルトル流の自己投企を指摘することは容易であるが、この試みがそれ程、容易でなかったのは言うまでもない。大江の願いは絶えず次の声によって阻まれていた。

僕は沖繩へなんのために行くのか、という僕自身の内部の声は、きみは沖繩へなんのために来るのか、という沖繩からの拒絶の声にかさなりあつて、つねに僕をひき裂いている。（『沖繩ノート』）

「内なる逡巡」と「外なる拒絶」に逢いながら（それはヒロシマの時も同じであつた）、大江はあえて困難な状況を自らに課し沖繩を主体的に引き受ける。そして限りない異義申し立てを沖繩から受け続けながら、ついに「日本が沖繩に属する」という認識の逆転に至る。この日本を相対化する目は沖繩から更にインド、アジアへと視点を拡大することで一層、顕著となる。そこからは日本人が無意識に持っている「中華思想」の幻であることが忽ちに露呈される。

この架空の中華思想の「破れめ」が沖繩であることは言うまでもない。この「破れめ」から作家としての自己を誠実に見つめたものとして、広津和郎を論じた「文学者の沖繩責任」がある。

『沖繩ノート』時代、大江は沖繩文化の多様な側面を捉える視点を持ち合わせず、ひたすら憂鬱な色彩でそれを塗り込めたが、その

後、山口昌男の陽気で強靱な周縁論に啓発され、トリックスターの視点の導入にも心掛けた。又、『万延元年のフットボール』の「根所」という姓が伊波普猷の文献から借用したもので、協同体の核心をなす沖繩の精神であることも判明した。

このように大江の政治的言説は明快であり、時代に一定の役割を果たしてきたが、これと混沌とした文学的言説との間の落差が出版期から論者を戸惑わせてきた。大江も両者の「覆いがたい裂け目」という批判に心穏やかではなかった。

あの男のエッセイは「戦後民主主義的」であるにすぎないが、小説にはなにやらドロドロした異様なものがある、という評価をあたえられることがあった。（『鯨の死滅する日』この本全体のための最後のノート）

「あの男のエッセイはよく分かる」というタカのくくられ方は大江には耐え難いものであったであろうが、初期の「監禁されている状態、閉ざされた壁のなかに生きる状態」を描いた作品群とデモクラットとしての希望に満ちた言説との間には、明らかにギャップがあった。それは内と外、曖昧さと明晰さ、暗と明という小説とエッセイのジャンルの相違による所も大きいかも知れない。

公衆のまえで話していると、思わずしらずモラリスト風の口ぶりになる、ということがある。モラリスト風に性についてかたることは往々にしていやらしくなる。（略）ほくはついに自分をおチヨポ口をしたホノメカシ屋のように感じて自己嫌悪におちいる始末だった。（現代文学と性）

これは講演の時の自己抑制について語ったものであるが、評論の

場合、これとは逆の自己規制が働いたように思われる。大江は「エッセイ自体が、資質として自閉的な自分をいくらかなりと社会的なひろがりに向けて押し出してくれた」と述べている如く、エッセイを書くことで社会的存在としての自己を意識し、時代と関わりせることで自己を社会的に押し出して行こうと積極的に努めたフシがある。それがデモクラットとしての生き方であり時代の要請でもあった。大江はこれに律氣に応え、いつしか勤勉な優等生に育って行った。その風貌が次第にモラリスト風になって行くのも止むを得ないことである。ここにデモクラットとしてのエッセイストと、内部に混沌とした暗闇を抱え込んだ小説家との亀裂は覆い難い。しかし、「覆いがたい裂け目」を言うならば、それは時代の裂け目でもあるだろう。時代が大江という作家を要請し、大江というエッセイストを要請したのである。混沌とした暗闇と不思議に明るい希望とが同居した奇妙な時代。あるいは二つが同居しているかに見えて、作家の鋭い感性は時代の闇を正確に見ぬき反語的に過ぎ去った幸福な時代への挽歌を奏でていたのかも知れない。

その後の大江の文学的営為がこの両者のギャップを埋めるべく意識的になされたであろうことは想像に難くない。事実、七〇年代半ばより両者の距離は次第に縮まっているのではなからうか。混沌とした暗闇が薄まったのか、暗闇にエッセイが近づいてきたのか、これを後退と取るか成熟と取るか、あるいは変質と取るかは意見の分かれるところであらう。

これまでの政治的言説に比して文学について語る時の大江は実に自由で生き生きとしている。例えば戦後派の作家について語った

『同時代としての戦後』（一九七三年）は野間宏から森有正までを論じて、どれも楽しく刺激的である。この書以外でも大岡昇平、埴谷雄高、武田泰淳、堀田善衛、安部公房、中野重治、田村隆一らを語る大江の語り口はこれら戦後作家への敬意と愛情に満ちていて、大江がこれら戦後作家を同時代者と認識し、彼らの文学を継承、発展させようとしていることがよく分かる。

『レイテ戦記』の結びに刻まれた「死者の証言は多面的である。

レイテ島の土はその声を聞こうとする者には聞える声で、語り続けているのである」を踏まえて、大江は「へかれらと共有する同時代としての戦後を、深く認識することがなければ、はかならぬ今日と明日の、われわれの時代を十全に経験しようとする、われわれ自身の生の試みに、埋めがたい欠落が生じる」と述べる。これは大岡の言った「われわれはアウシュヴィッツを体験しなかったが、それを通過した時代としての、われわれの時代こそを共有しているのだ」という認識と正確に見合っている。大岡の戦中、戦後を真の同時代として受けとめ、これを継承しようとする大江の意図は明白である。それは堀田善衛を論じ「あらゆる人間の声にたいしてイエスという」と決意する者を描いた作家」という評価にもつながる。

同時に世界の前衛文学につながる安部公房評価には大江の目指す文学の新しさがあ

る。安部公房は、その文学の世界においてと同様、現実世界においても、狂気存在を深く知った人間の、最良の心の確かさを持っている人格のように感じられる。（略）僕にとって、現在もっとも重要な同時代の作家が安部公房であると、僕の考える所以である。

（「安部公房案内」）

大江も人間の狂気に深く関わった作家である。共に狂気を内に抱えこんだ人間存在への凝視者としての安部を買い、又、その文体について新しい地平を切り拓いた作家としてこれを高く評価している。同世代では戦後文学の意識的な継承者として高橋和巳に注目した。

明治文学への関心は官制「明治百年」への抵抗として始められた読書経験が直接のきっかけのようなものであるが、そこで再発見された子規に関するエッセイはどれも力がこもっており、中でも「子規はわれらの同時代人」（「世界」一九八〇・一）は圧巻である。変革期の生活者、表現者、教育者、啓蒙家、デモクラットとしてその全体が高く評価されている。過去の人間としてではなく同時代者として捉えることで子規の多面性が見事に息づき蘇えるのであるが、そのように捉えた大江の中に子規の精神が生き活きと息づき大江を励ましていることは言うまでもない。

大江は戦後文学者を論じて「へかれらはことごとく、ひとつの終末観的ヴィジョン・黙示録的認識を、その存在の核心においているように感じられる」と述べたが、この戦争よりくる認識はそのまま核時代という現代の状況を生き抜く大江の現実認識と重なっている。

「人類はふだんに『進化』して、ついには、ある亡びの、または全的な救済の、どちらにしても黙示録的、終末観的なヴィジョンにむかって、いまなお進み続けているのである」（「大岡昇平・死者の多面的証言」）。その状況を正確に見極めるのが文学的想像力であるという。そして、文学的想像力を終末観的状况に對置し、そこに人間的なるものを再構築することが希望に至る道だという。大江

が異和を覚えながら「救い」「救済」を口にしたのは「皇帝よ、あなたに想像力が欠けるならば、もはやいうことはありません」(一九六九年)に於てであった。そこから人間の苦悩を一手に引き受けたかのような大江文学の新たに困難な道程が始まるのである。それは「信仰を持たない者の祈り」にまで続いている。

今後大江は自己の全体を実現させるために評論とエッセイを書き続けて行くだろう。そして、かつて受けた評論と小説のギャップという非難に対しては、徐々にこれを縮めつつあるのも事実である。新しい救済としての文学をどのように完成させるのか、又、この困難な時代に我々をどこへ連れて行くのか、大江に寄せる期待は大きい。

なお、この集では『小説の方法』(一九七八年)『小説のたくらみ、知の楽しみ』(一九八五年)『新しい文学のために』(一九八八年)等に見られる構造主義、記号論の実践者、文学研究者としての大江の一面を代表する評論を採ることはできなかったが、貪欲な知の探求者として小説の読みを、文学研究を挑発し続けるその言説にも注目したい。

(一九九三年三月末日)

(付記) 作品の選択には團野光晴君の協力があったことを申し添えておきたい。